

HIRO

—息子の生と死が与えてくれたもの—



HIRO

—息子の生と死が与えてくれたもの—

目次

はじめに 『HIRO』の再発行に寄せて	1
第一章 息子HIROの死	3
第二章 メールから	23
第三章 「徒然日記」	36
第四章 再びメールから	56
あとがき	68

◆イラスト HIRO

◆表紙デザイン HIROの母

はじめに 『HIRO』の再発行に寄せて

メールをいただき、ありがとうございました。お元気でいらっしやることを知って、うれしく思いました。また、『HIRO』を再発行してくださるとのこと、ありがたいことです。

あの日から九年以上も経ってしまいました。今でも、あの子の死がまだ「生かされる」場面があるのですね。もちろん、私の中で、あの子はずっと生きています。でも、他人の中にも生かされることは、母である私にとつてもものすごくうれしいことです。ありがとうございます。

再度、読み返してみましたが、あんな拙い文章で……、と赤面の思いでいっぱいになってしまいました。でも、あの絶望のどん底で必死に生きていた時間の証あかしでもあると思います。そして、『HIRO』を読んでいただけはHIROの人生が報われるということのほかには、私の人生まで報われる側面もあることに気づかされました。

夫は一昨年十二月に前立腺癌で亡くなりました（発覚してから五年後でした）。夫の死はかなりこたえてしまい、心身ともにくたびれ果てました。HIROについても、夫についても、毎日毎日思っています。忘れたことはないのです。毎日悲しいですし、毎日寂しいです。

いつもいつも、「見えなくなってしまう人」の影を追いかけています。心の傷は癒えません。

心のどこかが壊れてしまつて、ある意味、心の障害者になつてしまつた感もあります。でも、「それでいい」とずつと思つてきました。それだけ私にとって大切に大事なものを失つてしまつたのですもの。当たり前のこととして受け止めています。

娘もいまだに苦しんでいます。HIROのことでは、私以上に彼女の中で「パンドラの箱」のよなものになつていきます。お兄ちゃんを死なせてしまつたのは、自分にも大きな責任があると思つているようです。彼女の中で「お兄ちゃんが疎ましい存在だ」と思つていた矢先に死なれてしまつたからだと言つて、泣き崩れたことがあります。つい最近のことです。ちよつとでもHIROの話題になると不機嫌になり、しばしば涙があふれてくる彼女です。

母親は、自分が子どもを産んだという点において、「母親である自分こそが一番つらいのだ。最も悲しんでいるのだ」と思いがちであり、その点で、ある意味、家族や他者に対して傲慢になりがちだと思います。私も、夫や娘や私の母に対して、本当に傲慢だつたと思います。

でも、自分の哀しみや苦しみを他者と較べてもなんの益もなく、遺された者たちと一緒に哀しみを共有することや、お互いの哀しみを理解して、いたわり合うことこそが一番大切なことだと思つようになりました。同じような立場になつてしまわれた人たちの心を癒やせることが少しでもできたら……。きつと、みなさん、同じような願いを持つておられるのではないでしょうか。

二〇一一年三月二十八日

HIROの母

第一章 息子HIROの死

HIROは私の長男。十七年間と十ヵ月、私はHIROと共にこの世で生きてきました。

HIROは初めての子でした。赤ちゃんのころから好奇心旺盛で感性の豊かな子でした。だから、あの子がしでかす様々なことを、私は「大変な子」とか「苦勞をかける子」と思うよりも、「子どもっていうものは、目に映るものは全てが初めてのことなのだから、何に対しても不思議で、珍しくて、好奇心をもって触りたくなくなってしまふ。それは普通の感情なのだから、変でもなんでもない！」と大いに評価していました。HIROが起こしてしまう困ったこと（周囲の人たちの目には）を「賢さ・心の豊かさの表れ」と思って、楽しい気持ちで見えていました。

HIROは私にとって、それはそれは楽しい子でした。もちろん、いろいろとしかしてくれましたから、怒ってばかりの母親でもありましたよ、当時の私は。それでも、心の底では面白い子と思っていました。そして、HIROの成長をずうっと楽しみにしていました。

小学一年生のころの作文。担任の先生に言われて書いた文章です。

『母の日にお母さんに一言書きましたよ』

おかあさん、げんきですか。かたをもんであげるの。ごがつになるとぶうるにはいって、あきになるとおちばであそぶの。ふゆになるとゆきであそぶの。

他の子たちは、「おかあさん、ありがとう」とか「おこるとこわい」ぐらいの表現しかできないころの作文です。なんと感受性の豊かな子なんでしょう！ 私は感動しました。

H I R Oが学校のプールに初めて入った時には、こんな作文を書きました。

きのはぶうるですべてかおがしたについたけど、おきあがれたの。それで、ぶうるとおはなししたの。こわかったよっておはなししたの。

遠足に行けば、石ころと遊んだことを作文に書くような子でした。

そんなH I R Oの感性が楽しくて楽しくて、私はあの子の感性を豊かにするために、たくさんの本をよく読んでやりました。もちろん読み聞かせの時間が楽しかったからです。寝る前の本の読み聞かせは日課になっていました。けれど、あの子の感性は学校教育の中でつぶされていきました。

私も教職に就いていますから、あまり先生たちのことを非難できません。しかし、先生といって

も、いろいろな人がいます。固定観念を押しつけるような人に対して、H I R Oは拒否反応を示すようになってしまいました。小学三年生の時に当たった担任はそんな先生でした。そこからH I R Oの人生は影を落とし始めました。そして、H I R Oは不登校児になりました。同時に、H I R Oは子どもたちの集団を見ただけで、恐怖感に陥るようになってしまったのです。

私は必死でした。H I R Oは担任の先生と直接闘うことはできませんので、H I R Oの代わりにその先生と理解し合おうと努力しました。でも、とうとうH I R Oの三年生は暗黒の状態のままで終わってしまいました。その後も、先生に対するH I R Oの信頼感は失われました。それは大人社会に対する不信感にもつながっていったように思われてなりません。

H I R Oにとっては、自由に自分を出せる相手とか、気の許せる場所においては、楽に生きることでできました。こんな健全な日記を書けるH I R Oでもあったのです。五年生の時の日記です。夫が長期入院をしていて、一時帰宅した時のことを書いています。

『お父さんが一日帰ってきた』

きのは土遊びがたのしかったなあと言いながら、朝起きると、うちのお父さんが今日の十時ぐらいに病院から一日帰って来るといふ。

やったー！ ぼくはものすごくうれしくなった。

おかあさんは、だから部屋をかたづけたらと言う。

ぼくは、そうしたいなと思うけど、どちらかというと、ぼくはあんまりそうじはしなくて、テレビを見ている方であった。

十時をすぎただろうか、車の音がして、うちのお父さんが帰ってきた。

ぼくは、そのうちへんな作文をあたまで考えていた。

「ぼくのお父さん」

「ぼくのお父さんは力持ち。今もぼくをだっこできる。」

「ぼくのお父さんは働き者。せんたく・ふろそうじ・お茶わん洗いがじょうず。」

「ぼくのお父さんは日曜大工・つくえ・いすが作れる。」

「ぼくのお父さん。ぼくはお父さんのことが大大大大好きです。」

なんて、あたまで考えていた。

そのとき、お父さんはH I R Oと言いながら顔をさすり、にこにこわらい、またぼくの顔を見て、わらっていた。

ぼくもいっしょにわらっていた。

けれども、H I R Oは一旦、緊張感を抱いてしまう「場所・空間」の中では、ありのままの自分

では生きていくことができなくなっていました。

中学に入った時、「生まれ変わって、一からがんばろう」と決意したようです。しかし、やり過ぎました。学校では、自分の持つ能力の二倍ものがんばりを見せてしまうような習性を身につけていきました。そういうのはいつまでも続くものではありません。学校では精いっぱいがんばる自分を演出するのですから、家ではそのバランスをとるために、今度は極端にわがままになっていったのです。中学生とは思えないような甘えを、母である私に求めたりもしました。

学校と家庭……。H I R Oの精神構造は両極端に振れて、揺れ動きました。

そんなことが続いていくうちに、H I R Oの精神はボロボロになったのです。そして始まったのが、家庭内暴力、拒食、過食、失語症、自傷行為……。そして、狂言自殺までも……。ある時は、警察のお世話にもなりました。

H I R Oの命を護るために私は一睡もできない日々が続きました。「もうH I R Oの命を護ってやれない」。私には彼を精神病院に入院させる道しか残っていませんでした。

もちろん、すぐに適当な施設が見つかったわけではありません。いろんな相談機関や保健所、そして精神病院に何軒ぐらい当たったでしょう。でも、そんな中で、一番明るくて清潔な雰囲気、かつ家庭的なところ（思春期病棟）に巡り合えました。H I R Oが中二の時でした。

そこにおける入院生活の中で、H I R Oは自分の心に湧き起こってくる不安感、焦燥感、またそ

の一方で、未来への夢、希望を、詩として表現していきました。十五、六歳の時に作った詩です。

〈信じる力〉

人を信じる事ができなかった

とてもみんなが怖かった

会う人、会う人、みんなのその目が

緑色に見えてきて、不安になった

多分、自分も変わってた

多分、やりかたまちがえてた

多分、みんなを知らないところで

いろいろ、本当に傷つけてた

自分も痛かったし、周りも痛かったし

自分もつらかったし、みんなもつかれてた

だけど、いつかのためを思い

だけど、未来のために自分にできるだけの事ガンバッタ

多分、みんなも周りも何かを考えてた
自分を守る一つの義務で……

だけど、ほんの少しの力が

だけど、周りを考えられないくらい

本当に足りなかったんだ

だけど、そのことは

だけど、昔の苦しいあのことは

たぶん、自分一人僕だけの考えだから……

だからいいんだ

それでいいんだ

もう、そのことは

けど、少しこの今の自分が

けど、少し周りでみんなが

不思議なオーラでおおわれている

そうだな

一歩や二歩は前進しているだろう

考えてこの道を歩き続けていこう

本当の終わりの終着駅のことは考えず

今を、前にまっすぐ

そして、信じる力を身につけて 走ろう！

病院における生活の中で友情も芽生え、HIROの心は徐々に癒やされていったようです。自傷行為、拒食症、失語症が改善されていきました。「死にたい」という気持ちが無くなったころ、入院治療から外来治療に変わり、待望の学校に戻ることもできました。しかし、根本的に治ったわけではありません。学校生活が与えてくるストレスに、HIROはすぐに負けてしまいました。そして、再び引き込みもり生活へ。思春期病棟への入退院を繰り返しました。(全部で三回の入院生活です)

そんなHIROでしたが、幸いにも彼のような子を受け入れてくれる高校が見つかり、病院生活を送りながらも、そこから通学もできるようになりました。HIROの心の中では、葛藤があったものの、そうした中でも希望の光が見え始めてきました。十七歳の時の詩です。

〈出発駅〉

意外に「時」というものは非情なもので

本当に刻一刻と時間は経過していきます

でも、自分はどうだと考えると

今の場所・道・街から、どこまでやって

どうやって抜け出すかが決め手

だから、今から出発だ

無駄なことは全部どっかに捨てて

この場所から飛び立っていくのさ

あの雲にのって

そう、あれが出発駅

だいじょうぶさ

もちろん、不安はしようちの上

すると、一人孤独になり、いじめられた覚えもあり、もう知能LEVELを低くしたくない。

みんなと同じくらいの理解力のある、応用力のある人間になりたい。

今ならどうですか？ 退院。

たとえば、このまま、この病棟にいて、

考えなくちゃいけない事が何年もかかるのをお母さんはただ見ているだけ。

それよりも退院して、親の言うことを必ず聞いて、応用していきたいんです。

だって、人生の青春時代をけがされるのはもうたくさん。

みんなと同じになりたい。

ぜったい、このままだと遅れるどころか、

閉じこめられる生活を続けると……、

「生きる」ということに楽しみまでもてなくなってしまふ。

お母さんはどう思いますか？

ちゃんと言ったことは全て守ります。

だから、先生を裏切る形になるけれど、

毎週ちゃんと外来を二回でも三回でも言われたら通うから退院したい。

もう、最近、何のために生きているのか？ まで考えている。

もっと、知識とかをつけてみんなを追い越したい。

病棟から毎日のように家族に宛てて手紙を書いて送ってくれました。HIROが逝ってしまう一カ月くらい前から、その頻度は多くなっていき、死の十日くらい前には毎日になりました。その手紙はたいがい私宛てでした。

HIROが亡くなる一週間前（五月二十二日）に私にくれた手紙は、今の私の心を癒やしてくれる内容でした。その手紙があるから、私は今、救われているようです。その手紙をご紹介します。

『HIRO〜！ガッツだぜ〜！』

お母さん、本当に今、HIROは生まれてきて良かった！と実感しています。

なぜでしょう？

この間までは「死にたいよ」と心の中で叫んでいた自分が

「本当に駄目で醜い」と今は思えるくらいにプラス思考になることができました。やっぱり、最近、友達と仲がよくなったことも理由の一つだと今は思います。生きているってサイコー!!

そして、なにより、そんな「HIRO」を作り出してくれたお母さんに感謝!!。(パチパチ) HIROはプラスに生きるよ。信じてね!

今だって、HIROは制限されていても、そこがポイント〜! ガッツだぜ〜!

今のHIROに与えられている課題が今の制限なんだ! って思うと、何に對してだって平気な顔をしていられると思うんだ。

そして、「今、HIROはHIROの力で生きているんだあ……。」
なんて思えば最高だよな!

もう一度思いだしてみよう。

(Ayu) ♪

今日がとても悲しくて明日もしも泣いていても、

そんな日々もあったねと笑える日が来るだろう♪

的な感じかな?

(中略)

本当にHIROは生まれてきて、「良かった、ありがとう」と心の底から思っています。

HIROは私のことを、その日の気分で「お母さん」と呼んだり、「ママ」と呼んだり、時には手紙の中で、本名で呼びかけたりするような子でした。

「生きる希望」が湧いてきたんだ! 本当に良かった——と、心からホッとした家族でした。ところが、そんな矢先に、魔がさしたのでしょいか、六月一日、なぜか入院先の病院から脱走してしまったのでした。四階の病棟窓から抜け出したのですが、奇跡的に落ちることなく、タクシーを使って我が家に戻ってきたのです。

「あの病院にはもう戻りたくない! この家で暮らした」と

HIROは必死に私や夫に懇願しました。けれども私は、一泊だけでもさせれば良かったのに、すぐにHIROを病院に帰すことしか考えられませんでした。実は、明後日に私の勤務校で運動会があり、明日は運動会の準備をする日だったからです。私は総責任者に当たっていました。そのことが頭のほとんどを支配していたため、HIROを一泊さえさせることができなかつたのです。

「こんな僕と嫌々ながら暮らすのと、あの病院に放り込んで一生会えなくなるのと、お母さんはどっちを採るの?」

H I R Oは迫りました。私はこのように答えたのです。

「嫌なお前と暮らすことは選ばないよ。でも、病院にいたら絶対に治るんだから。一生会えないなんて思わない。とにかく今日は泊めるわけにはいかないのよ。病院に送るからね」

きつと、この言葉によってH I R Oは絶望したのでしよう。それなのに、私はH I R Oの絶望に全く気がつきませんでした。(H I R Oへのこの言葉の冷たさがいつまでも私を苛ま^{さいな}せます。「H I R Oを殺したのは私だ」としばらくの間、そう思って、自分を責め、呪いました)

おとなしくなったH I R Oを車に乗せようとした瞬間、サツと彼は逃げたのです。ものすごい勢いでした。私も夫もお祖母ちゃんも、みんなH I R Oを追いかけました。

でも、暗闇の中にH I R Oは消えてしまいました。必死になってみんなでH I R Oを捜しまわりました。見つけた時、H I R Oは近くのマンションの二階の廊下の手すりにいました。

そして、アツという間にそこから飛び降りたのです。打ち所が悪くて(肋骨が折れて肺に突き刺さり、心臓を圧迫したのでした)、即死に近い状態であの子は逝ってしまったのです。私の目の前で、あの子は逝ってしまいました。

私は、目の前で起こった出来事がとても信じられませんでした。なんだか「仮想現実」を見せられているような気持ちです。私の目の前にいるH I R Oは息もせず、安らかな寝顔にも見えませんでした。でも、まるで蠟人形ろうにぎょうのようでもあり、「悪夢なら早く覚めてほしい」と、私はずっと叫び続けて

いたようにも思います。しばらく私は意識がなくなっていました。意識を取り戻しても、その「悪夢」のような「現実」は変わりませんでした。いつまでもH I R Oは蠟人形ろうにぎょうのようでした。

H I R Oの死に顔を何人もの人たちが見に來ましたが、誰もが、

「本当に安らかだねえ。まるで眠っているようだ……」

「この寝顔のような安らかな表情を見ると、あの世にいるおじいちゃんにだっこしてもらえただって分かるねえ」

などと泣きながら言っておられたように思います。でも、その時の記憶はあんまりないので、私は思いません、ぼんやりとしか分かりません。

ただ、いくら気が狂ったように泣いても、わめいても、蠟人形ろうにぎょうのようになってしまったH I R Oは、二度と動くことも、目を開くこともしてくれませんでした。冷たく、硬くなってしまった頬を、身体を、何度も何度もさすっても、頬ずりしても、頭を撫でて、あのH I R Oの温もりは再び戻ってきませんでした。「絶望のどん底」というものを私は生まれて初めて体験しました。

H I R Oのお通夜・お葬式・火葬……と進行していきましたが、私にとっちはいつまでも「仮想現実」を見させられているような気持ちをぬぐい去ることはできませんでした。

人間って、ショックが大きすぎると涙も出ないことがあるのだと、今回のことで私は知りました。

私は、HIROの死を医者から伝えられた時に、発狂してしまったように泣きわめいて、その後、意識を失ってしまったのです。意識が覚めてからは、「泣く」というよりも、「大声で気が狂ったようにわめいていた」私でした。（恥ずかしいなんていう感情は皆無でした）

でも、その後のお通夜やお葬式では、涙は一滴も出なくなっていました。感情が無くなったようで、それこそ私の抜け殻がただ息をしていただけでした。泣かない私を見かねて、私の友人たちはとつても心配してくれましたが、どうしても泣けないのです。泣きたいのに泣けない。（こんなに悲しいのに、どうして泣けないのだろう……）

泣いてくれる大勢の人たちを見ながら、泣ける人を心の中で私はとつても羨ましく思っていたのを覚えています。

それから今日まで……、

「HIROの死を無にしてはいけない」

「HIROがこの世でやりたかったことを、私が代わりにやらなくてはいけない」

そんな思いに取り憑かれたように、私は「HIROの詩集」作りに精を出し、全国のみなさんにHIROの思いを伝えなければいけないと思つて、「HIROのホームページ」作りに励んだり、など様々なことに時間を費やしてきました。

けれども、あの日から全く変わっていないことが一つ。それは朝、気づかされます。

「ああ……。また、HIROがいない世界で生きていかねばならないのか……」

という気だるさの中で、朝を迎えること。どんな感動的な出来事があつても、どんな素晴らしい本に巡り合えても、どんな優しさに出会えても、その感動は一過性のもの……。

「HIROがこの世にいない」

「私の心にいるかもしれないけど、それを本当に感じることは二度とできないのだ」

という現実に向き合うその時間。何にもごまかせないで、ぼんやりとした頭でいるのが朝なのです。

「HIROの死は自殺ではない」

「HIROは私に心配をかけたただけなのだ」

「怪我をして入院しても、あの病院だけには戻りたくなかったのだ」

「HIROにはつらすぎた人生だったから、あの世にいるお祖父ちゃんがあの子を救ってくれたのだ」

「HIROの早すぎる死は彼の運命だったのだ」

そんなふうに分身にいくら言い聞かせても、「HIROにはもう会えない」という事実だけは変えるわけにいきません。また、「HIRO君はあなたの心の中にいるのだから、あなたが幸せにな

らなかったらH I R O君は幸せになれないのよ」という言葉も、その場限りの慰めになってしまつて、そのうち空しさに変わってしまいます。

私はこんな言葉で傷ついてしまったこともあります。

「元氣そうになつたね。良かった」（元氣に見える？ 私の心の闇なんて知らないくせに……）

「早く元氣になつてね」（そんな簡単に元氣になれるものでない。一生なれないかも……）

これなんか「いい言葉」にほかならないでしょうか？ 相手に悪意なんか何もないのです。それでも傷ついてしまったのです。

「H I R Oの死」の現実とは、どこまでいっても、いつまで経っても変わらないのです！ こんな「我」ばかりの私でいる限り……。そう気がついた時に、私は「我」とうまく付き合っていける方法はないかと思いました。そんな中で出会ったのが「坐禅修行」です。

「坐禅によつて何か得るだろうと期待してはいけない」

ご縁があつた師匠（曹洞宗のお坊さん）に言われています。でも、「我」に出会った時には、

「正しい坐禅によつて、我をうまくやりすごすことができるようになる」

「坐禅中に頭に生じてくる我を相手にせず、邪魔にもしないようにしていけるようでない……」
と言われて、やはり、その境地に期待してしまつていける私です。

H I R Oが亡くなって七カ月。私の今の心境はこんなところです。

（二〇〇二年一月三日）

第二章 メールから

☆：私はあの日から、あまり家族に腹を立てることがなくなりました。けんかもほとんどしません。それはなぜだかお分かりになるでしょうか？

今回のことで、「家族の死が一番恐怖」だつてことが分かったからです。相手にどんなに苦勞をさせられても、「その存在そのもの」がどんなに価値のあることなのか痛いほど分かったからです。そして、家族の死に顔は、誰のだって、もう二度と見たくないのです！

だから、例えば、夫に対してムツと腹を立てる瞬間があつても、次の瞬間には「お棺に入った蠟人形みたいな夫」を想像してしまう私です。それは本当に悲しく、つらく、怖いことです。それを瞬時に思ってしまうから、今ここにいる「ちよつと腹の立つ」夫がとっても愛おしくなります。

「ああ、生きていてくれて良かった」って、心底思えます。

あの「恐怖の日」から、私たち遺された家族はより一層、心を寄り添わせて生きていく感じがします。唯一それが、息子の死が私たち家族に与えてくれたことのような気がしています。

（二〇〇二年一月四日）

☆：朝日新聞の二〇〇二年一月九日付の記事に、私と似たような境遇の方のことが載っていました。その記事には、二十四歳の息子さんが自宅のマンションから飛び降り自殺されてしまった主婦の方の、悲しみの中から次第に自分を取り戻すことができるようになるまでの軌跡が書かれていました。そのお母様の、息子さんとの苦闘の日々や、死んでしまったことを自分のせいにして悔いていることについて書かれている部分は、私と全く同じだったので、共感し、涙を流してしまいました。

でも、その中に「子を亡くした夫婦の仲は壊れやすい」ということが書かれてあって、「後追い自殺まで考えてしまった」というその方と私との違いについて考えてみました。

そして気がついたのは、私にはカウンセラーという存在があつたことです。HIROは精神科にかかっていました。だからHIROが死んでしまった後に、私のことを心配してくださった担当医師が私にカウンセリングを勧めてくれたのでした。

私としては、そこに入院していたあの子を感じたくて、そのためだけにカウンセリングを受けることにしましたが、その中で自分の思いをぶつけていきました。

「夫は、あまり仏壇の前で拜んでいない」

「夫は、あまり涙も見せない」

「夫は、忌明けの日から職場に戻れた」

こんなことが「夫の息子に対する愛情の不足」だと感じていました。そして、自分の悲しみを分

かってくれる人は家族にもいないと、初めのころは思っていました。だって、夫や娘たちはお笑い番組に大笑いをしているんです。私の感覚は麻痺していましたから、テレビを見て笑っている家族を許せませんでした。

（私は一生、心から笑うことはないだろうに、なぜ家族は笑えるんだろう？ 可哀想なHIRO：。お母さんだけはあなたのことを思っって一生悲しんでいるからね。笑うことなんか一生ないよ）

こんなふうな孤独感にひたつていました。そんな不満をカウンセラーにぶつけたのです。でも、カウンセラーは、こんなふうに話してくださいました。

——悲しみの表現は人それぞれに違うんですよ。泣いて悲しむという表現もある。泣けないほど悲しい人もいる。また、悲しみをどう乗り越えるかも人それぞれ違います。旦那さんのように仕事に逃げる人もいる。あなたのように悲しみにひたつている人もいる。

でも、これだけは言えますよ。家族が同じ悲しみ方をしないから救われているってこともあるんです。

仏壇の前で時間をかけてお経を読んでいる妻を見て、旦那さんは自分ができないことをしてくれているあなたに救われているのでしょし、旦那さんが仕事に向かつてくれているからこそ、あなたは息子を思うことに専念できるっていう事実もある。

もしも夫婦そろって仕事に就けなくなつて、家で二人して泣いてばかりいて、共に暗くなつてし

まったらどうなりますか？ 共倒れでしょう？

どちらかがしつかりしなければならぬと思うから、旦那さんはしつかりせずにはいられないのかもしれない。あなたを支えなくてはいけないと思って、しつかりしていることで救われているかもしれない。つまり、家族はバランスをとっているでしょう。――

私はそのお話を聴いて、ハッと気づかされました。夫の悲しみと娘たちの悲しみについて初めて目が向きました。母である私が家族の中で一番悲しいのだと思いましたが、思春期の多感な年頃に、すぐ上の兄を亡くしてしまった娘（高二）の気持ちは、そうした経験のない私には分からないのかもしれない……。

そう思ったら、どうしても娘の心の内を知りたくなり、娘が作っているホームページの日記をこっそり見てしまいました。（本当はしてはならないことだったのですが……）

七月八日（二〇〇一年）

無理矢理でもこのホームページを立ち上げた日で、それは私の大切な、大切な兄の誕生日です。なんて私って皮肉な女なんだろう……。

そして、今日はその兄の四十九日でした。

六月一日。この日、私の最愛の兄は亡くなりました。この世にこれほどまでにつらいことはないと思います。自分自身が傷を負うより、ずっと大きな苦しみでした。その日から、私は心の底から本当の喜びを感じてはいないのかもしれない。

私は意地っ張りだから学校の友達に同情なんてされたくなくて、一生懸命明るくふるまっていました。笑っていれば一瞬でも楽になれるかなって。だから、とことんアホなことを言ってみたり、部活に打ちこんでみたり。友達もできるだけいつも通りに接してくれたり、笑わせてくれたり。だけど、そのひとは癒やされたりもしてたけど、やっぱり無理に普通に行っていると、かえって反動がひどくて疲れてしまったり。そして、友達でも他人は他人だから、私が明るくしているとすつかり私は立ち直ったと勘違いして、たまにものすごく残酷なことを言ったりします。

私はまわりの人間からは強い人間だと勘違いされることが多いです。でもそれは、今までの私の短い人生の中で、そうしなければ生きていけなかったから、無理して強がっているだけなんだよ。私は本当に自分でもびっくりするくらい精神的な面で弱い人間なんです。笑いとばしていても、実はその後ずっと悩んでいたりするんです。

そうでなくたって、自分の兄の死を一カ月やそこらで乗り越えられるわけないでしょ。誰でもいいから、お願いだから、私の弱さに気づいてよ。

今、私は恐ろしく自分らしくないことを書きました。私は基本的に他人を信用しない人間だから、

人に弱みを見せることは許されないことだと思っています。それなのに、私がこんなことを書くなんて……。

やっぱり、今日の私はおかしいようです。つらすぎるので今日はもうやめます。

こんなことを書いてしまったけど、私はお友達が大好きです。そして、ありがたいとも思っています。私が一人で恨んでいるだけで、友達に罪は全くないことも分かっています。

自分の醜すぎる精神がいや。悪いのもすべて自分。

生きているのが本気でつらい。あと何年生き続ければお兄ちゃんに逢えるの？

でも、私は死ねない。家族がいるから。

○やっぱり、人に心配されたくない

お母さんが一番弱っているし、妹は私より小さいのだから、私がみんなを支えなくちゃいけない。お父さんだつてつらいのだから休ませてあげたい。

いつまでも私が弱っていたら、たぶんお母さんは本当に苦しくなる気がする。私はできるだけ早くいつも通りに戻らなければならぬ義務がある。それがたとえわべだけであっても、私にはそれができるだけ、お母さんよりも傷が浅いのだから。

妹は私より兄に似ていたので、とつても気が合っていたからつらいし、何よりまだ十三歳。お父

さんは私ととても氣質が似ているので気持ちがよく分かる。きっと大丈夫に見せかけて、かなりつらい思いをしていることも。やらなきゃいけないことがあるので、悲しんでばかりはいられない。そんな責任感とか。だから時々グツタリしているのを見るとつらくなる。

だから私は、しっかりしなければいけない。

○一人でいなければ、兄を必要以上に感じなくていい

一人でウチの中にいるのは、はつきり言つて拷問です。だれもない家の中で絵を描いたり、テスト勉強をしていると、どんなにそれに打ちこもうとしても、お兄ちゃんを感じてしまいます。

今、お母さんは仕事を休んでいます。でも、私はかえって早く仕事に戻ったほうがいいような気がします。本当にお兄ちゃんのことばかり浮かんできて、気がおかしくなりそうな勢いです。

○その他の人がいれば気がまぎれる

人に自分の無様な姿は見せたくない。(下らないプライド)

そんな感じで、私は普段、人がいれば結構大丈夫な人なのですが、昨日は調子がおかしすぎました。反省。

でも、またお盆や百カ日が近づくとおかしくなるのかな。嫌だな。

何だか今日も、ろくに頭が働いていないようなのでやめよう。

以上です。

私はこれを読んだ時に愕然となってしまうました。娘は絶対に仏壇の前で拝んだりしません。そんな娘のことを冷たいと思っていました。しかし、人の心の中は娘といえども分からないのだと、あらためて思い知らされました。

娘がホームページに書いていることを知った時、自分の浅はかな心を恥じ、思わず娘をしつかりと抱いている自分がいました。娘も私の気持ちを肌で感じてくれたのでしょう。私に抱かれることに抵抗せず、私の胸の中でいつまでも抱かれ、そして泣いていました。二人一緒にいつまでも……きつときつと夫の心もそうなのかもしれない。そう思った矢先に知った事実です。夫が人知れずに仏壇の前で泣いているのを……。声を上げずにじっと耐えるように、涙をこらえるように……。仏壇の前の夫の姿は本当に小さかったです。その彼の姿に胸が痛んでしかたがありませんでした。それからでしょう、家族に対して心から愛おしく思え始めたのは。 (二〇〇二年一月十三日)

☆：自分の心の底をのぞいてみると、自分に「絶望」した私が見えてくるのです。あの時、何はさ

ておいても自分の身の心配をした私です。私が自分の命よりも大事に思っていたはずの、大事な大事なHIROのことよりも、自分の身を心配に思ってしまったのです。私には自分自身のほうが大事だったので……。

もちろん、その時は、その選択があの子の命を絶ってしまうことになるとは露ほども思っていないませんでした。でも結果として、自分の利害を採ったためにHIROを失ってしまった。

私は自分に「絶望」しました。なんてひどい親でしょう。私は自分を責めました。でも、どんなに責めても、悔いても、事実は変えることはできません。私は我が息子を殺してしまった。そんな真つ暗な思いでいた時、

「自我と一度は真正面から向き合わないと、仏には出会えない！」

インターネットの掲示板で、この言葉が目飛び込んできました。私はその掲示板に自分の思いを書き込み続けました。しかし、掲示板での会話の中で、

「自我と正面から向き合うのは難しい。自分の心の底をのぞいたとしても、それは上げ底だ」という指摘を受けました。私が見てしまった心の底は上げ底かもしれませんが、そんな上げ底でさえも醜く、目を背けたくなるような状態だったのです。でも、「そこを見なさい。そうしないと、『絶対他力の世界』の境地には至れない」とおっしゃってくださる方もおられました。

誰が見ているかもしれないインターネットの掲示板に自分の醜い姿を書いてしまったのも、格好

つけても、どうしようもない自分を見つけたからです。こんな愚かな私を参考に自分自身の人生について考えてくださる方がいらっしやったらなあ……という願いもありました。

そんな自分に「絶望」した私ですが、願いに向かって自力を尽くしたいとは思うのです。こんなひどい私でも、最初から「私はなんにもできない」と、すべてを神や仏に託すことは、やはりできませんでした。とにかく、何かをやってみる。「できる」「できない」とか、結果はあんまり考えずに、とにかく、今やってみる。その結果は未来に任せたらいい。大事なのは「何かやってみる今」しかないのだと、私はそう思うのです。

(一月十六日)

☆：私はあの日を境に、自分の感情が無くなってしまいました。悲しいという感情だけが研ぎ澄まされていて、あとは麻痺してしまっただけに……。夫婦げんかをしなくても、麻痺からかもしれません。何を言われても、「私が悪かった。ごめん」です。傷つきすぎた私の感情は麻痺してしまっただけです。

娘からも言われます。「お母さん、最近怒らないね」と。夫もあまり腹を立てません。彼も感情が麻痺してしまっただけかもしれません。「あのこと」があんまりつらすぎて、それ以外のことは「なんでもないじゃない」みたいな感じがしてくるのです。

(二月八日)

☆：私は今までに味わったことのない感情を毎日感じています。例えば、バレンタインデー。毎年、H I R Oには私からあげていたんですよ。でも、今年は仏壇に供えるだけ。その空しさは経験者には分からないと思います。そして、その事実が「みんな自分のせいなんだ」と思ってしまう時、私は自分の中の「悪」をいやでも感じてしまうのです。

(二月十三日)

☆：私はどん底に落ちて醜い自分を知り、けれども、そこからここまで救われました。ここまで救ってくださった存在は神（仏）だと思っています。だから、根底では「大いなる偉大な存在のおはたらき」（他力）を感じているのです。

坐禅修行における師匠は、こうおっしゃいます。

「まずは、ただ坐ることだ」

とにかく坐れと言われるのです。そうして坐っていても、無我の境地に立てるわけではありません。それを言いますと、

「それでいい。でも、ただ坐る。頭の中はいろいろ浮かんでくるだろう。それを邪魔にして追い払うでもなく、逆に楽しく相手にするでもなく、頭に浮かんできたものをすうっとやりすごして、とにかく、ひたすら真剣に坐る。その姿は紛れもなく仏の姿そのものなのだ」

私はその言葉通り一生懸命に坐っています。「ただただ坐ることが仏の姿」という言葉がとって

も嬉しく心に響いたからです。

師匠は、こうも語ってくださいました。

——あなたは息子さんを亡くして悲しみにくれていますね。それは我々人間から見れば親の優しい情愛に見える。しかし、本当はあなたの我がつくり出している悲しみなのだ。悲しんではいけないと言っているのではない。それにとらわれてはいけないということだ。

坐禅によって何か得ることを期待してはいけない。もちろん坐禅を始めたからには「さとり」は大事であるが、さとれなくても一向に構わない。ただ坐禅を続けることによって定力じょうりきはついてくる。我を捨てようなんて思わなくてもいいが、我が生じてしまっても、それをうまく上手にやり過ごせるだけの定力はついてくるからね。——

とても勇気の湧いてくる言葉でした。この言葉を信じて、現在は精進しているところです。週に三回、四十分を二セットです。土曜日だけ四十分を三セット行います。家では四十分を一セットのみ。家だと甘えてしまつて四十分を一回やるのがせいぜいです。とても熱心な師匠で、たまには私と二人きりの時もあるのですが、それでも付き合ってくださいます。有り難いです。(三月七日)

☆：人は悲劇には遭いたくありません。でも、「何もなくて、なんとなく人生が終わってしまった」という人生って、私には無意味だという感じがしてきました。何にもなかったけれど、今まで

の人生に何か満ち足りていなかった私。それがなぜだったのか、今回のことでちょっと分かったような気がしてきました。何もなかったら、仏にも遇わなかったのです。

「気づかされた人生」ということについて、ある先生がおっしゃっていました。気づかされた人生になったのです。それを知るための授業料としては、「HIROの死」は高すぎましたが、それを払わなくては、私には到底気づかなかった真実だったのです。(三月八日)

☆：理想と現実の狭間で窮屈に生きている私。でも、求める気持ちは人一倍あると思っています。求める気持ちは「必死」に近いと思います。私には「息子の死を無にしたくない」という強い強い思いがあるからです。私が息子の死をもってしても何も得なかったら、その時は「息子の死」が無くなるということ。それは絶対にしてはならないのです。(三月十九日)

第三章 「徒然日記」

2002年2月18日(月) 日記開始

徒然なるままに、日記をつけることにする。

今日、出会った本。葉祥明さんの『アッシジの光』『ひかりの世界』『リトルブツダ』。素晴らしい世界、HIROの世界がそこにあった。HIROが今そこにいるのかと思っただけで、幸せになれる世界……。

本屋さんで立ち読みをしながら、涙があふれてきてしまい、本を汚しはしないと心配になった。結局、三冊を立ち読みして、三冊とも買った。今夜は睡眠薬を飲まないで、この三冊の本を読みながら眠りに就くことにしよう……。きつと眠れるような気がする。

『アッシジの光』と『リトルブツダ』は、娘に読んで欲しいから、娘に勧めてみたけど、目を通してくれるかな？

2月28日(木) 久しぶりの更新

ホームページ作りを始めてから五カ月になる。一月まではがんばっていたのに、二月に入ってから

らはサボってばかりいた。何だか気力がなくなってしまった。だから、いろんな掲示板に書き込んだり、気の合った人とメールのやりとりをしながら、ごまかして一日を過ごした。

あの日からがんばって走り続けてきたので、ちょっと自分に「お休み」をあげたくなったのかも。しれない、と自己弁護する私。結果、「なんにもやっていない自分」を自分が嫌いになってきた。

このホームページを作る中で、HIROを感じたいと思っていたのに、それをお休みしてしまうと、HIROが私から遠ざかってしまうようで、それも怖い気がしてきた……。

「でもさ、仕方がなかったのよね」と、またまた言い訳をさせておくれ。だって、娘が大変だったんだもの。HIROだって分かってくれるよね。だから、だから、更新どころじゃなかったってこともあるのさ！

でも、だったら、なんで他の掲示板に書き込んだり、メールしたりできたの？ そんな時間があったら、HIROのホームページ作りができたのでは？

責める自分と言い訳する自分が心の中で闘っていて、自分が苦しくなったから、今日は申し訳程度の更新をしたわけ。がんばる自分を私は大好きなだけで、がんばらない自分も認めてやらないと、これからの人生やっていけないかも……。いろいろとぐだぐだ言っている今日の私。明日から三月。あと一カ月で復職。やりすぎない程度にがんばりたいと思う、二月最後の日の私。

3月1日(金) 今日は何の日

毎月一日は月命日だ。あの日から、もう九カ月も経ってしまった……。きつと、

毎月、「もう〇〇カ月も経ってしまった」

毎年、「もう〇〇年も経ってしまった」

と思うのだろう。一カ月経った時も、「もう一カ月も経ってしまったのか……」と思ったもの。

「どんなに時間が過ぎても、あの子の姿をこの世で見ることはない」、そう思った時、自分が絶望の淵に立たされていることに気づく。そして、「ここに心がある」と分かるくらいに胸がきゅーんと痛んでくる。苦しいくらいに……。あの子を思う時、後悔ばかりが頭を占める。後悔しかない。

「後悔先に立たず」という諺があっても、実際に後悔した時に初めて分かる、その言葉の重さ。

人間が教育によって悟れることなんか皆無なのかもしれない。実際に私が悟ったことは、「失敗」「後悔」などの「経験」からのみのようだ。「H I R Oの死」を「後悔」だけで済ませないように、これからの私の人生をしっかり歩まないといけない。とはいえ、大げさな立派なことなど何一つできないだろう。

「この一日を無にしない」

それだけを肝に銘じて毎日を生きていこう。

「今日を自分らしく生きることにします。四月には四月の風が吹くでしょう……」

私の同僚から最近頂いたメールの言葉である。とってもステキな言葉なので、心にインプット！

3月4日(月) カウンセリング

私は隔週ごとにカウンセリングを受けている。カウンセラーはH I R Oの担当医師だった女医さん。素晴らしい方だ。彼女と話すたびに、涙と共に心の中の「氷のような悲しみの塊」が溶けていくのを感じる。だから毎回楽しみに通っている。

本当のことをバラしてしまうと、私にとって彼女に会うのが楽しみである一番の理由は、「彼女に会う＝H I R Oに会う」だからである。そこはH I R Oが入院していた病院。そして担当医師はH I R Oにとって第二の母。彼女は私の知らないH I R Oを知っていて、教えてくれる人。だから彼女に会うだけで、私は「生H I R O」を感じることができる。それが私の心にはとってもイイのだ。「彼女」というと冷たい感じがするので、以後、「K先生」と書く。

今日も隔週のカウンセリングの日だった。いつもそうであるように、今回もなんにも話題を考えずにカウンセリングを受けた。でも、毎度のように中身の濃いカウンセリングタイムになった。(一時間のカウンセリングタイムをオーバーし、一時間十五分もお話しできて良かった！ K先生には申し訳ありません)

「最近、泣きたいのに泣けない」

「それは、なんだかHIROに対する愛情が少ないように感じて悲しい」

「悲しい映画を観ると、滝のように涙があふれて止まらなくなるのに、HIRO関係では最近、ほとんど泣かなくなってしまった」

「ホームページ作りを淡々と行える私の精神は周りからは強いと思われているけれど、そうなんだろうか？」

なんにも考えていなかった話題だったが、次々に脈絡もなく支離滅裂な状態で、自分の気持ちを吐き出す私。そんな私に、K先生はいつものように、とつても嬉しい言葉をかけてくれた。

——お母さんは、HIROの死んだ当初は半狂乱だったよ、大抵の人がそうなってしまおうようにね。でも、お母さんはずっと泣いたままではいなかった。詩集作りを始めた時、ホームページの開設をしたり。それは、ある人たちからは強い人間に思われてしまうかもしれない。泣き続けているほうが、その人の悲しみの程度を理解しやすいもの。

けれども、私にはお母さんが強かったからやれたとは思えない。それは、お母さんのHIROに対する深い愛情の形だったんだよ。お母さんは「HIROはどうしたら喜んでくれるかな」とばかり考えていたんでしょ？

そして、ホームページを開設した時、それは悲しいことだったの？ いいえ、うれしいことなん

じゃない！ HIROができないことをHIROに代わってやれたんだよ。HIROを喜ばせたかったお母さんなんだもの。HIROが喜ぶことをやれて、うれしく思ってたんだ！ だから、泣かなかっただよ。

でも、悲しい映画を観て泣いてしまうのは、それは、悲しみの部屋のカギを開けられたから。心の中はきつと泣きたい気持ちでいっぱいだったんだよ。いつ泣いていいか、無意識の中で自分で「悲しみのお部屋のカギを開けてもいいか、いけないか」のコントロールができるようになったんだよ。HIROを思って泣くのも、HIROが喜ぶようなことをやって泣かずにがんばるのも、どちらでもまさしくお母さんの愛情の形なんだよ。HIROはきつと喜んでるよ。

一番お母さんを好きだったHIROだったんだよ。お母さんが自分のために一生懸命にがんばっているのを嬉しく思うに決まっているじゃない！——

私はK先生のお話を聴きながら、涙が止まらなくなってしまった。いつもながら、有り難いK先生のお言葉……。こうして、私はまた一週間がんばれる。後の一週間は、ちよつと喘ぎ喘ぎ暮らしていくって感じ。そして、「葉が切れた」状態になって、再びK先生のところへ駆け込むのだ。

ああ、カウンセリングってありがたい。K先生に感謝、感謝！

3月6日(水) 「HIRO教」

H I R Oは私の天使になった。

H I R Oは私の仏になった。

H I R Oは私の神になった。

そう。私はそう確信しているのだ。「願う」ではなくて、「信じている」のである。

宗教というのは、「目に見えないものを信仰し、その信仰によって救われる」ことなのだろうと思うが、その勝手な公式に当てはめた時、私は確かに宗教を持っているし、信仰心の厚い信者となる。ただし、もちろん既成の宗教ではない。強いて言うならば、名づけて「H I R O教」！ 教祖さまは誰もいない。信徒は私一人の宗教である。

この宗教は、いろいろな宗教や思想の影響を受けている。

「キリスト教」

叔父がキリスト教の牧師をしているために、聖書にあるいろいろな聖句をもつて、私に勇気や希望を与えてくれた。ネット上で出会ったTさんからも多大な影響を受けた。葉祥明さんの美しい絵本にある、「魂の故郷」の考え方もTさんから教えられて、大大大感激した。

「真宗（仏教）」

これはネット上での出会いのみである。でも、阿弥陀様は悪人こそ救ってくださいと。私は「悪人」を自認しているので、この教えには大変救われた。そして、救われない私だからこそ救お

うとしてやまない仏の慈愛の心を知って、私は大きな安心を得た。

【禅宗（仏教）】

毎日行なっている坐禅。素晴らしき師匠との出会い。

悪人であれ、善人であれ、一切衆生は仏だ。

そんなバカな……。最初に聴いた時は、正直そう思った。でも、仏教の教えは深く、容易な道ではない。自分の中の仏の姿に出会うのはそうそう容易ではないのだ。そのための修行が坐禅。

十年が一つの単位というから、その道は遠く険しい。本当の悟りの境地に立てるまでには、何千年もかかるという。つまり、生まれ変わり、死に変わりして、何代にもわたって悟りを求め続けな

いと得られない境地だそう。はたして、軟弱なこの私に続けられるのか？

でも、私は前述した出会いや感動は全て「H I R O」が私に与えてくれたものと信じ切っている。「お母さん、よくここまで、ぼくを信じて、ぼくの声に従ってくれたね」

そんな声が聞こえてくるような気がするのだ。

師匠も言った。

「人生に偶然など一つもない。全ては必然、因縁なのだ」

私も実感として、それは受け入れられる。全ての出会いは、私に必要なからあるのだ。人間の私

の目には不必要にしか思えない出会いも、遠回りにしか思えない事柄も、全てHIROが与えてくれた出会いであるし、一番の近道になっているのだ。何かを私に伝えたくて、わざわざイヤな出会いを与えている場合もあるに違いない。

こんな境地に立っているのです、私にはこれからの人生で「本当の嫌悪感」はないと思う。人間だから、無論、「嫌悪」してしまうことは多々あることだろうが、それでも、「HIROが私に何かを伝えたくて、わざわざ与えてくれた試練」だと思えたら、きっとそれを受け入れられるだろうと思う。

そんな気持ちで、

今の苦痛①HIROに会えない。寂しいなあ。

②娘が心配。

③胃が痛い。つ、つらい。

④味覚の異常。ああ、不快だあ。

……等々、身を起こる困難を乗り越えられる私になりたいと思う。

だから、私のメシアの「HIRO」、どうか私を助けてね！そして、私をいつも救ってくれて有り難うございます。

3月14日(木) 人の心

たとえば、笑っている人を見る。「ああ、あの人は楽しいんだな」と、単純に思う。

たとえば、泣いている人を見る。「ああ、あの人は悲しいんだな」と、またまた単純に考える。

普通の顔をした人。その人の心の中は全く見えない。

悲しみを心に秘めているのか？

喜びに満ちているのか？

失敗を悔いているのか？

明日への不安におののいているのか？

しんどい身体と嫌々ながら付き合っているのか？

だから、人は分かり合いたい時、話をする。話し合えば、少しは分かる気がする。

でも、人間の会話ほどあてにならないものはない。話をする、分かったような気になるだけ。

そして、安心するだけ。

なんだから、ひねくれたことばかり書いてあるみたいだが、「あの日」から、単純な私もちょっと複雑になった。

「元気そうあなたを見て安心した」

HIROのことを語る時、私はなぜか涙が出るよりも嬉々としてしまうのだ。熱くHIROを語

る私を見た人は、単純に立ち直ったと思ってしまうのだろうが、それは仕方のないことだ。(だから、責めているわけではない)

でも、熱く語れば語るほど、実は、その後の気分の落差は激しく、ドーンと落ち込んでしまう私、おいおい泣いている私を誰も知らない。(家族だけは知っているが……)

表面上の顔と言葉は、その人の心の内を語ってくれない。身をもって、そのことを知った。だからこそ私は思うのだ。道ですれ違ったあの人の心の中はどんなだろう？

平静を装って歩いている私を「なんにも悲しみが無い人」と、きつと思われているように、普通の顔をしたあの人も、何もなさそうに見えるはするけれど、本当の心の内は誰にも分からないのだ。(もちろん、私にも……)

H I R Oがいなくなつて、私はこんなに悲しくて、寂しくて、心の中は真っ暗なのに、世間の人たちはみんな明るい。なんであんなに明るい顔をしていられるのだろうか。

当初はそう思っていた。けれど、それがどんなに浅はかで、自分勝手な考え方であったか、というのを思い知らされた。

「思いやる」というのは、「相手の立場になりきつて考えてみる」ということなのだろうと思うが、今までの私は、いつだって「自分の立場」からしか発していない「思いやり」だったことをつ

くづく思い知らされる。なんと思いやりのない、そして思い上がった人間だったのだろう。

きつと、「元氣そうね」という言葉を掛けてくれた人も、その人の心の中では、「本当は悲しいのでしょうか」などといった、ものの分かったような言い方は口が裂けても言えない……と悶々としていたのかもしれない。分からないのだ、本当の気持ちは誰にも。人間(私)は人の心が分からないのだ。そういうことが分かったのだ。

だから、自分勝手に想像して「あの人は幸せそう」なんて羨んだりしないようにしたい。(笑つて気分転換をはかっているのかもしれないのだ)

また逆に、「あの人は悲しそう」なんて、哀れむのもおこがましいことなのだろう。(涙を流すことで立ち直ろうとしているのかもしれないから)

家で飼っている愛犬のロウリイのように、なんにもしゃべらずにじっと見つめていたほうが、本当は相手の心は見えてくるのかもしれない。その人の心が分かりたいと思ったら、ただただ相手に寄り添うしかないのかもしれない。そう……、だまつて。

3月20日(水) 忘れるもんか!

「どんなに悲しくても、それが嫌でも、あなたはその人のことを忘れていきます。あなたの深い感情は、砂浜の砂の城のように少しずつ無くなっていきます。もし、それが嫌でも、あなたの悲しみ

は砂浜の城と同じで、いつまでも残り続けることはありません。雨や風や波によって、やがて砂浜の一部に戻り、海に洗われるただの砂に戻ります」

この文章に出会った時、私の心は硬直した。私が、忘れる？ H I R Oを忘れる？ そんなバカな！ そんなの絶対に嫌だ!!

「それが嫌でも、あなたはその人のことを忘れていきます」

その言葉が頭の中でリピートされた。その言葉との出会いがあったからかもしれない、私がH I R Oのホームページ作りを決意したのは。私は、「忘れない」努力を毎日した。H I R Oの癖・仕草・眼差し、そしていろいろな表情を……。笑った顔・泣いた顔・怒った顔・照れた時の恥ずかしそうな顔・一心に何かに打ち込んでいる時の顔・喜びに輝く顔・美味しいものを食べている時の満足げな顔・歌ったり踊ったりした時の顔・得意になっている顔……

H I R Oのくるくる変わる表情をイメージしてみる。写真を見ながら、家事に取り組みながら、買い物しながら。何をやっていても、心のH I R Oに話しかける習慣もついた。(この日記を書いている今も！)

「忘れるもんか、忘れるもんか」と、私の脳の働きに逆らうように……。

私は「忘れること」が得意中の得意だった。「あなたの長所は？」と聞かれたら「忘れる能力が

あること」と答えるくらいに……。

嫌なことがあっても、嫌なことをされても、「忘れる」。

夫婦げんかをして、忘れる」。

穴があつたら入りなくなるほどのことがあっても、「忘れる」。

失恋をした時も「忘れる」という能力を發揮した。そうやって、人生の苦境を乗り越えてきた私だった。でも今は、その唯一の「能力」が呪わしい。だから、「忘れるもんか」「忘れるもんか」と、あの日から心の中で念仏のように称えて暮らしていた。

先日のカウンセリングの時に、そのことを話題にした。

「忘れたくないから、必死になってイメージトレーニングをしているんですが」

そうしたら、我がカウンセラーのK先生はこのようにお話ししてくださったのだ。

「お母さん、私は逆だと思ふな、その言葉は。忘れたくなくても忘れてしまうのではなくて、忘れたくても忘れられないんだよ。それに忘れるわけじゃないじゃない！ H I R Oはみんなにとってインパクトが強い子だったよ。私や看護婦さんの心に今でもしっかり焼きついているよ。「忘れたくない」とお母さんが必死になんかならなくても、忘れるもんですか。

だから自然体でいいと思う。自然に暮らしていたって忘れるはずがないよ。そして、H I R Oを喪って、ぽっかり空いた悲しみの穴がふさがること、同時にないのだと思う。

こんな私が犬を飼おうという発想になったのも、娘の精神の救済をペットにお願いしようと必死になったことがあるのだが、その発想はきつと「HIROのおはたらき」なのだ。

「学校の教え子たちからのラブコール」

十カ月もお休みした職場復帰が迫っている。戻っても浦島太郎になってしまうのでは？という不安が頭をよぎる。また、明るい私に戻れるか？ 自然な笑顔になれるのか？ 不安は尽きない。でも、そんな時に届く、子どもや親たちのラブコール。これも、「HIROの温かいエール」に感じてしまう。

まだまだ例をあげるとキリがないのだが、私にはあの日から、本当の意味で「不幸」と思えることがない。みんな「HIROのおはたらき」と感じられるから。「HIROのおはたらき」だなんて、そんなのは自分がそう思いたいだけなのでは？

自問自答してみた。確かにそういうこともあるかもしれない。でも、それだけではないのだ。HIROの肉体は既不在のだから、肉体の死は認めるが、だから命もなくなったとか、魂もないのだとか、証明することは誰にもできないのだ。

「命は永遠に続く」

この言葉を『葉っぱのフレディ』で見つけた時、私はとっても幸福になれた。こういうのは、た

だの「物語」に過ぎないのか？ それだって誰にも証明できはしない。ただ、私はこう思う。

「はたらきとしての『HIRO』は確実に存在するのだ」

例えば、サンタクロースも同じだ。クリスマスのサンタクロースだって、大人には「いない」と分かっている、子どもだましだということになっている。が、私はクリスマスに愛するわが子にプレゼントしたくなる「はたらき」を、実在してはいないサンタクロースがしているのではないかと思う。だから、サンタクロースは「はたらきとして存在する」のだ。

それなのに、物知り顔に「本当はサンタクロースなんていないんだよ」と言ってしまう子どもと、「サンタクロースは絶対にいる」と信じ切っている子どもでは、どちらが幸せなのだろう？ 答えは決まっている！

子どもの世界としては、目に見えないけれど毎年、プレゼントをしてくれるサンタクロースを信じ、「また今年ももらえた」と嬉々としているほうが当然、幸福だと思う。同時に、「本当は親があげているのに」などと、子どもをうまくだませたことを喜ぶ親は一人もいないだろう。子どもが喜ぶ姿を見て、サンタクロースのプレゼントを喜ぶ子ども以上の幸福感を得るのだ。

大人は気がついていないだけだ。子どもに夢を与えなくなる親の心こそ「仏の心」だし、「神の愛」だということ……。そんな親の心の中にこそ、「仏」も「神」も、確かに「いる」のである。

私は、そういう意味で「神」も「仏」も「HIRO」も「サンタクロース」も、その「存在」を

信じている。実在してなくても、「はたらきとしての存在」を信じている。

ちよつとしつこいが、なんだかもうちよつと書きたくなった。

「亡くなったHIROはきつと魂のふるさと（ひかりの世界）にいます」

葉祥明さんの絵本の世界のような「美しい物語」を私に与えてくれた人がいた。そのイメージは哀しかった私の心にも優しくかったので、私はそれを信じようとした。それには、まずは自分を酔わせたり、信じようと思ひこませたり……自然にしたいくなる。自分の子どもをお持ちの方なら、この気持ちには「当たり前前の親心」だと分かり、バカにはしないだろうと思う。

そういう優しいイメージを持たせてくれる「宗教物語」は人間にとって、とても大事だと思う。それを「それはたとえ話だよ。神や仏の実体があるわけではないのだ」と夢を壊すようなことを言うのは、「サンタクロースなんて親がしていることだ」と子どもにばらしてしまうバカな親と同じだ。（何を隠そう。もはやサンタクロースを信じていないと思って、中二のHIROにそれを告白したのは、この私。なんとHIROに「信じたかったのに……」と言われて、愕然^{がくぜん}となってしまった）

「正しいことは、これこれこういうことだ」と、分かったような口を利くのが大人。でも、本当のことを分かっているのだろうか？ だって、どんなに賢い人だって、所詮は人間なのだ。神でも

仏でもない。（いくら本具^{ほんぐ}仏性^{ぶつじょう}であっても）

そんな未熟な人間の分別なんてものは、大層なものではないはずだ。もちろん、私も前述したような「宗教物語」を信じ切っているわけではない。（悲しいことに。本当は信じ切れたらなあと思うくらいだ）

でも、「もしかしたら、そんな美しい世界——本当の魂のふるさと——ってものがあるのかもしれない！」と考えることはステキではないか。だって、私の人生が終わった時に、またHIROに会えるってことになるのだから!!

今回は、「この世に神も仏もいる」ことについての私なりの所見を書いてみた。思いのままを書き連ねてしまった。毎度のごとく支離滅裂な文章にご勘弁あれ。

第四章 再びメールから

問い（编者） 仏教でも、キリスト教でも、自分が罪人だということを強調しますね。

返事（HIROの母） このごろ、ずっと考えていることなのですが、「救い」を請うている人にしか宗教は必要ないのでですね。そういう人は、自分の中に少なからず罪の意識を持っているのだと思います。

順風満帆な人生を歩んでいる人が宗教の世界に入る場合もありますが、そういう人は興味や関心から宗教の世界に入るわけでしょうから、その人にとっての宗教は単なる教養や娯楽の域を超えないのではないのでしょうか？ そういう人には罪の意識がありませんから、心の底からの願いがないと思うのです。

本当に心の底から「救われたい!!」と願う人は、「絶望した人」自分の中に罪を見つけてしまった人」だと思います。神や仏が真つ先にそういう人を救いたくなるのは至極当然だと思うのですが、いかがでしょうか？

そういう意味で、心の底から宗教を求める人たちには、ことごとく大なり小なりの「絶望体験」、そして「救われたい願い」があると思います。だから、罪の意識はどの宗教にも欠かせない大事な要素になるんだと思います。

ただ、その「罪」について、「これでもか!」「まだ足りない!」「お前は煩惱だらけのどうしようもない人間なんだぞ!」と、何度も突きつけられてしまいそうな感じがあり、言われなくても罪の意識をいっばいに持っている私にとっては、なんだかしんどくなるのです。

宗教を求めてやまない人たちというのは、もうすでに自分の中に罪の意識を持っていると思うのです。だから、そんな苦悩に満ちた人たちには、「もういいよ、そんなに自分を責めなくても。阿弥陀様がいつでも一緒におられるから、もう安心だよ。阿弥陀様は、あなたを見守り、共に悲しみ、痛んでくださっている。だから、もう大丈夫だよ」って感じで話されたらいいように思うのですけれど……。厳しさを強調してしまうと、今が一番しんどい人にとってはつらすぎると思うのです。

まあ、人はそれぞれですから、同じように考えてしまっただけではないかと思いますが、信仰心が厚い人たちは、とつても悲しいことを経験なさっているような気持ちがあります。

（二〇〇二年八月一日）

問い どういうことが救いだと思いますか。

返事 私の場合ですと、「HIROを喪うしなった悲しみを心の中に秘めつつも、それでも人生を生き抜いていかれ、その時、その時に、感動を見いだせるということ」が救いだと思います。悲しみを無くするとか、忘れるということは、私の場合には救いになりません。忘れる、無にするということは、私に

はかえってつらいことですから……。

「仏とか神とかと共に生きていくという実感を得ること」を「悟る」というのではないかと思うからです。私の場合は、「HIROと共に生きていく」ということです。それを実感できた時、大安心感を得られると思います。悲しみを胸に秘めつつも、真の幸福感を得られると思うのです。（八月三日）

問い 苦しみや悲しみと喜びとは、どういう関係にあると思いますか。

返事 HIROを喪ったことによつて、私は心の傷を負ったわけです。それはある意味、障害的なもので、傷は、薬でもリハビリでも、そして時間でも完治できません。たとえば、目の障害を負ってしまった人は、その目を見えるようにすることはできません。「目が見えない」という一点では、「悲しい」「苦しい」わけです。

でも、その目が見えなくなったという事実は、不幸ばかりをもたらすわけではありません（これは負け惜しみということではないのです）。目が見えなくなったことによつて得られるものが、必ずあると思います。苦しいけれど、視力を失ったことによつて得られた何かは、他の人には得られない「すばらしい」何かなのでしょうね。そんなたとえでは分かりにくいでしょうか……？

私の中で、愛するHIROは失われたわけです。その失われたHIROは二度と取り返すことはで

きませんが、失うことによつて「自分自身」を知ることができました。そして、その自分がどんなに不安定なところで生きていたか、そういう自分の足元を見ることもできたわけです。

そして、その不安定で真っ暗な世界の底にも温かな光が注がれていることを知りました。それは、どん底の暗闇を知らない人には見ることでできない温かな光だったわけです（もちろん、精神的な光、たとえですよ）。HIROを失った悲しみ、苦しみをもちつつも（いえ！ 持っているからこそ）出会えた光の存在。これなんです!!
（八月七日）

問い 「光」とは、具体的にどういうことでしょうか。

返事 「光」というと、なんだか、とつてもまぶしくて、幸福一色の感じがしてしまう表現ですね。だから、「光」という言葉は、この場合、ふさわしくないのかもしれないかもしれません。ただ、私が陥ってしまった絶望の世界は、あまりにも真っ暗闇だったので、そこに差し込んできた「光」はとつても有り難くて、精神的にはまぶゆく感じてしまったのでしよう。

その「光」をもっと具体的にお話ししましょう。HIROの死が私の人生になかったとします。HIROだけでなく、三人の我が子の誰の死もなかったとします。普通の人生はそうですね。子どもの死という経験は特別です。あまり経験される方はいないでしょう。

その場合、きつと可もなく不可もなくという感じで人生が終わったことと思うのです。子供が「存

在」するといふだけで幸福だなんて思わなかったでしょう。自分の「存在」を有り難いと、自分の人生があることを感謝することもなかったに違いありません。今のように日常のごく当たり前の事柄一つ一つに感謝したでしょうか？（今は、感謝、感謝です）

それから、時たま腹立たしいことに遭遇することはあっても、後になって、「それも私の人生には必要なことだったなあ」と、感謝できる私になったこと。

それら全ては、HIROの死がなかったら味わえなかった世界観です。HIROを失うという経験が、今までできなかった思考の仕方を生んでくれたのです。それは「光」でなくてなんでしょう？これが私にとつての、大事なものを失った時に初めて得られたことだったのです。

私は視力を失う経験は持っていないませんが、目が見えるという素晴らしいことが本当に分かるのは、視力を失った人だと思ふのです。「今、生きている！」、この不思議で素晴らしいことについて、死を間近に控えた人が一番分かるように……。

息子の死によって自分の死を疑似体験した私です。自分の死とは違うと言われてしまえば、それに反論はできませんが、自分の死に一番近いのが我が子の死ではなかるうかと思ひます。もつと言えば、ある意味、自分の死よりもつらいわけですから。

このくらいにしましょう。ちよっぴりは「私にとつての光」について、分かっていただけでしょ
うか？
(八月八日)

問い 子どもを亡くすようなことがなければ、光体験ができないのでしょうか。

返事 他の人はどうか分かりません。少なくとも、私はそうだったのです。子どもを亡くすということだけでなくもいいのですが、それ相当な絶望体験がなければ「光」には出会えなかったと思ひます。以前なら、今、得ているものについて当然としか思わなかったのです。それが少しでも不足すれば、文句を言いこそすれ……。

なんであれ、自分に生じたことを「ありがたい」と思える「今」（すぐにはそう思えないことはよくありますけれどね）。HIROのことがなかったら、そんな「今」を獲得できなかったと思ひます。
(八月十日)

問い 大切な人が死んだからといって、みながみな光体験をするわけじゃないように思ひますが。

返事 みなさん、光体験をしているのかもしれないませんが、本当はね。ただ、それに気がつかないだけでか、それとも、みなさんは光体験を大げさに考えているので、私の話を聞いたら、「ああ、それが光だとしたら、そんなことは私にも体験があるわ」と思われるかもしれません。

つまり、私の光体験というのは、日常（生きているという事実そのもの）が有り難く、「自分の力を超えたもの」で成り立っていることに気がついたということですから……。つまり、「他力本願」なの

ですよ、根本はね。

「光」に自力で出会えた、というよりも、「光」が自分を照らしてくれていた（人生の初めから今までずっと）ということに気がついた、ということだと思えます。悲しいことに、HIROの死がなくてはその真実に気がつかなかったということですが、私の場合は。

支離滅裂かな？ 分かりにくいでしょう？ みんな光に出会えているのだと私は思うのです。それが一番言いたいのかな？
（八月十一日）

問い こうしたふうに話されるあなたを、他の人は「息子さんの死から立ち直った」と思うんじゃないでしょうか。

返事 まさか、「私が立ち直った」と思っただけではありませんね。でも、多くの人たちは私が立ち直ったと解釈しているでしょう。人の心の闇は誰にも見ることはできませんから……。しかし、私が立ち直ったと誤解されてしまうことは、やはり悲しいです。それもまあ仕方がないかなとも思うのですけれども……。

私は行動することで悲しみから逃避しているだけかもしれませんが。自分の心の闇を見たくないから、それから目を背けるために何か（HIROに関する）ことだったら、罪悪感に苦しめられることがないので、HIRO関係のこと）に夢中になれたと思うのですよ。そういう行動は、人からは「強い」「立

ち直った」と誤解されやすいですよ。

でも、今、悲しみにひたって泣いてばかりいる人は、もしかしたら私よりも立ち直りは早いかもしれないなとも思います。私はこのごろ、「悲しさ」や「つらさ」では泣けないのです。悲しい時には泣くことのほうが素直な行動ですから、泣くことのできる人は自分に素直になっている分、心の傷も早く治っていくような気がしています。

悲しい時に泣くのは精神的にとってもいいのでしょうか。HIROの死で一番泣いたのは末娘でした。それこそ、タオルを抱えて大泣き。タオルをしぼるとジャーッと涙がしぼり取れるのでは？と思ってしまうくらい。それに対して、長女は苦しむような泣き方でした。うまく泣けないのです。夫は目を真っ赤にさせながら、ぐっところえて震えていました。私は感情の全てが無くなって、きつと阿呆みたいな顔だったと思います。

でも、一番泣くことができた末娘の立ち直りが一番早かったです。今、日常生活を順調に送れているのは彼女だけかもしれません。だから、涙の効用は大きいと思えます。それを知っているのに、なぜこんな方法を探っているのか、自問自答してみると、ちよつと見えてきたようなんですが……。

私は幼いころから、自分自身で解決でき得なかった難題には、「忘れてしまおう」という方法を探ってきたのでした。いつでもそうでした。でも、今回の人生最悪の出来事には、この「忘れてしまおう」という方法が全く使えないのです。HIROの存在がなかったことにしたり、HIROの死をなかった

ことにしてしまうことができるわけがない（それができたら、どんなに楽でしょうか）のは当たり前ですよ。

でも、泣くという方法を今までの人生であまり採ってこなかった私は、その方法も簡単には使えない。だから、H I R O に関することに没頭して、一日を生きることしかできなかった。ただ、それだけなのです。

（八月十二日）

問い それでも「あなたは強い」と考える人は多いと思いますよ。

返事 私は「強い方ですね」と言われるのが一番つらいのです。だって、「強い人」|| 「こんなつらさを感じるに耐えられる人」|| 「もしかして、鈍感な人？」|| 「もしかして、息子に対して愛情が不足していた？」と、私の連想がいやな方向にどんどん進んでしまうから。そんなことを考えてしまう私です。

私は本当に強いのか、否か？についてずっと自分に問い続けました。そこで、思いついたことをお話ししたいと思います。私がこうして生きていられるのは、H I R O が「無」にはなっていないと信じ切れていることが大きいんだと思います。

あるホームページの掲示板で、我が子を喪って半狂乱になってしまわれた方が、心の叫びを訴えられていました。その中で、「我が子は「無」になってしまった」と絶望されていました。もう我が子に

は絶対に会えないのだ……と。我が子が「無」になってしまったのだから……と。

そこを読みまして、私の場合は全く違うと思いました。私は「肉体は一生見られないが、あの子は天使（仏・神）になって、私と共に生き続けてくれてる」と信じています。その信仰が私の心の支えになっています。その信仰心を維持してもらえるかのように、いろんな出会い（人・本・インターネット・宗教）が自分の元にやってくる力がなっています。

私はどの宗教や宗派にも属していませんが、その手前勝手な信仰心は、もしかしたら敬虔な信者のそれと一緒に厚いものだと思います。

こんな強さは私自身の精神的な強さではありません。

「H I R O が私を支えてくれている」

この一点信じられるか否かが、本当に大きいのです。もしかして、そんなことは「まやかしの世界」だと、真正正銘の神が現れて証明したとするなら、その時を境に私の生きる意欲はゼロになってしまうでしょう。信仰心は人の心を強くしてくれるのだと思います。そして、その強さは、自分本来の強さではありません。H I R O が私を強くしてくれたのだと、私には思えるのです。（八月十三日）

問い お子さんを亡くされたご夫婦は、死んだお子さんのことを話さない場合が多いと聞いたことがあります。ご家族で息子さんのことを話し合われますか。

返事 もちろん！です。我が家では、私が中心になってH I R Oのことを話題にします。

H I R Oはこんなだったね。

犬のロウリーの仕草はH I R Oそっくりだね。

H I R Oの好物はお肉だったね。

H I R Oはお寿司が一番好きだったね。

H I R Oはこんな失敗をして、みんなを振り回していたね。

H I R Oは、それでも優しい子だったよ。

私を中心になって、こうしてH I R Oを話題に出します。このごろでは、家族もそういう会話に慣れてきたようです。一番、話題に乗ってこなかった長女もちゃんと乗ってくるようになりました。私はH I R Oがいつまでも我が家の家族の一員であること、我が家は五人家族であることを変えたくないのです。

我が子は三人。

我が家族は五人家族。

H I R Oはお騒がせマンで、我が家のアイドル。

亡くなったお子さんのことをどうしてお話しなさないのか、私には分かりません。

いえ……、そうじゃありません。私にはあの子が「無」になつてしまうことが恐くてたまらないの

です。泣けないということも、泣いてしまったら、H I R Oの存在を否定してしまう感じがして、それがブレーキになっているのかもしれない。だから、H I R Oのことを話題にするのは本当はつらいのですが、しかしあの子の存在を確認したくて話すのでしよう……。

あの日から悟ったことですが、人の心は誰にも分かりません。だから、死んだ我が子のことを話せないというご夫婦のお気持ちを勝手に察したり、非難したりはできないのです。私のことを非難してほしくないと思うのですから……。私だって、誰かを「自分と一緒にじゃないから」と、非難できるものではありません。心の闇は絶対に分からないのです……。

(八月十四日)

あとがき

私どもは真宗大谷派の寺院です。ご門徒さんのお宅におまいりをした後、雑談をしているうちに、逝去された方の思い出話になることがあります。時には、話をしながら涙を流されるご門徒さんも珍しくありません。大切な方を亡くされた悲嘆の深さを拝聴して、私自身、多くのことを学ばせていただきました。

ご遺族の心情、思いを一人でも大勢の方に知っていただきたいと思い、文集を作ろうと思いましたが。そこで、ご縁のある方にご協力をお願いしました。その一人がHIRO君のお母さんです。唐突な依頼だったので、当初はとまどわれ、立腹されたのではないかと思えます。いろんなご事情もありでしょう。それにもかかわらず、匿名を前提として手記を綴ってくださいました。そして、いろいろな質問にも丁寧に、しかも本音でお答えを寄せていただきました。しかも、手記は心に響く内容だけに、文集から切り離し、小冊子として出版したいという私どもの頼みにもご承諾くださったのです。

著者には何かとお手数やご面倒をおかけしてしまい、どれほど感謝しても感謝し尽くせません。本当にありがとうございます。

今回の出版に当たって付記したいことは、いろいろな方々のお世話になったことです。とりわけ

て著者が手記の執筆するまでには、心の支えとなっているテルゼさん、悲心さんのお二人からの励ましがあったと聞いております。また、ODAさんには出版や編集のプロの視点から、編集の基本、文章作法の指導などまでボランティアでお力添えいただきました。印刷、製本を担当してくださった関係者を含めて、皆さま方にあらためて心からお礼を申し上げます。

円光寺

(二〇〇二年五月八日)

第二版のあとがき

今回の再版にあたり、『HIRO』出版後にHIROのお母さんとやりとりしたメールを第四章として加えました。そして、HIRO君の手紙と、再版の承諾をいただいたメールを「はじめに」として載せています。

『HIRO』が、身近な人を亡くされたお気持ちに沿うものであれば、と願っております。